

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*) とは



セミタケはニイニイゼミの幼虫に寄生する冬虫夏草の仲間で、名古屋周辺では6月下旬～8月上旬に見られます。宿主であるニイニイゼミの幼虫は巣穴の上部で踏ん張る様な状態で絶命しており、通常、その頭部から棍棒状の子実体が発生します(右写真)。

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*) の子実体

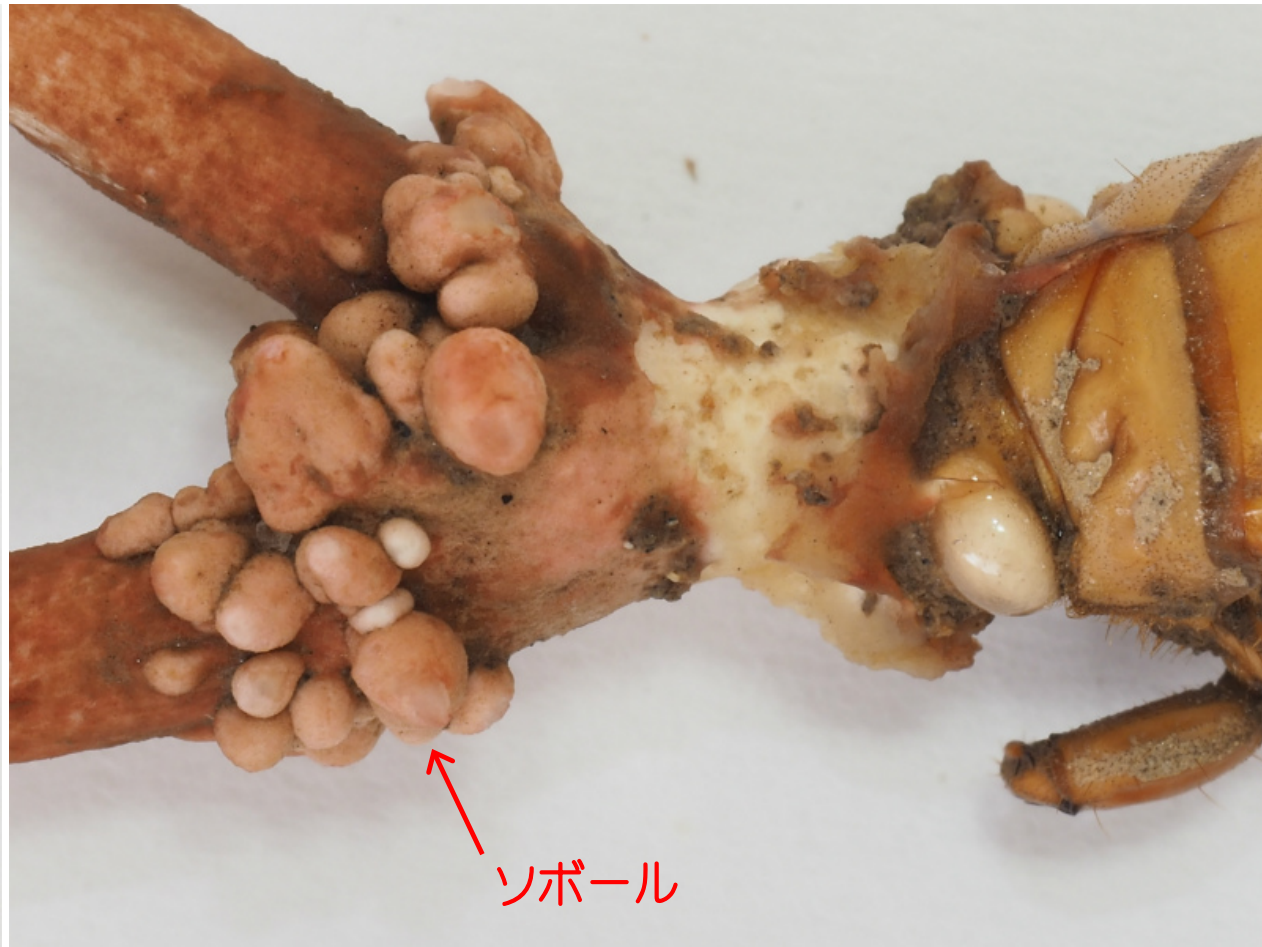
セミタケの子実体は、通常、宿主であるニイニイゼミの幼虫の頭部より単生しますが、時には複数に分岐する事もあります。子実体は棍棒状で、柄部の先端には子嚢胞子が形成される結実部が存在します。

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*) の採取



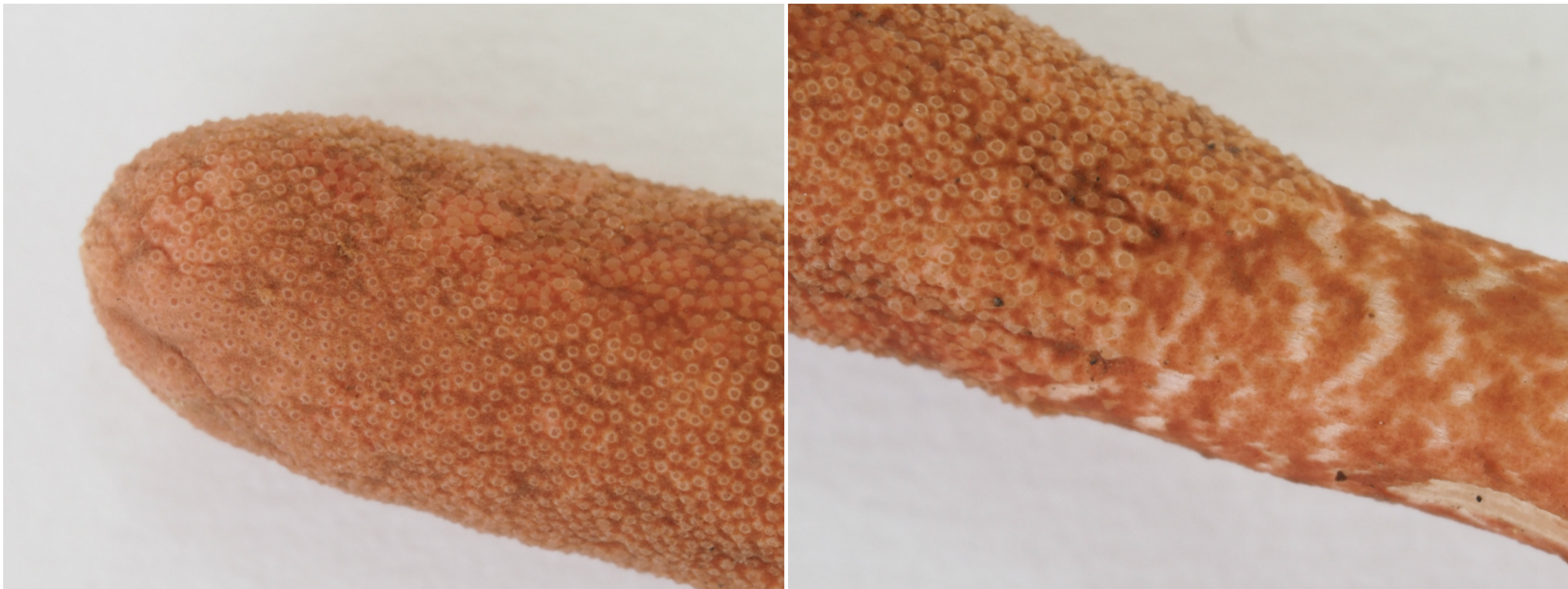
セミタケは宿主であるニイニイゼミの幼虫が比較的地上に近い地下部に位置している事が多いため、採取(掘り起こし)自体は容易です。また子実体も太く大きめで、色も淡い橙褐色であるため発見し易いです。

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*) のソボール



しばしばセミタケの子実体の根元にこぶ状の「ソボール」という器官が形成される事があります。ソボールの内部には楕円状の「厚膜胞子」が形成されます。厚膜胞子とは、栄養菌糸の一部が細胞壁により区画され、肥厚する事で厚膜化したものです。

●セミタケ (*Ophiocordyceps sobolifera*) の子嚢殻



セミタケの子嚢殻は埋生型で、その孔口は結実部上に点状に分布します(左写真)。柄部は淡い橙褐色のだんだら模様です(右写真)。この模様はセミタケに特徴的で、子実体の形態による同定を行う際の大きな情報となります。

●キシノウエトタテグモとクモタケ (*Odontomachus monticola*)

クモタケはキシノウエトタテグモを宿主とし、巣穴中で感染します。虫体を栄養分として菌糸を伸ばしながら成長し、やがて宿主を死に至らしめます。そして梅雨時に、虫体から子実体が発生します。子実体は巣穴内部から外に向かって成長し、巣穴の扉を押し開けて地上数cmの高さまで伸びます。

●熱田神宮の参道で見つけたクモタケ (*Odontomachus monticola*)

